

広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要
(第44号 2016.3)

幼小接続期におけるカリキュラムの開発

—幼稚園教員による小学校授業への参加を通して—

池田 明子 広兼 睦 掛 志穂 中山 芙充子 石井 信孝 松崎 伸一
長澤 希 石田 浩子 井上 弥 中村 和世 三村 真弓

1. 研究の目的と背景

本研究は、幼稚園教員・小学校教員がそれぞれの校種の保育・授業に参観・参加し、それぞれの専門性を活かして交流することを通し、幼小接続期におけるカリキュラムを開発に向けた基礎的情報を得ることを目的とする。特に本研究では幼稚園教員による1年生の授業参加を通して認識した共通点・差異点に着目する。

幼小連携に関しては、文部科学省(2010)が、その重要性を示している。亀山(2011)は年長児担任保育者の記録から生活科に繋がる気づきを分析している。善野・前田(2012)は、幼小教師の意見交換をもとに週案フォーマットを作成している。このように接続期カリキュラムに関する提言を示すものについては先行研究があるものの、幼小教員が互いに学び合いながら接続期のカリキュラムを改善していく具体的な過程や、その過程に影響する要因などに関しては、ほとんど明らかにされていない。

池田ら(2014)は、小学校教員が保育に参加し、議論する中で、幼小昨年度より幼小連携にかかわる研究を進め、互いの保育・授業を参観・参加し、協議を深めることで、教師のかかわり、教材のとらえ方、保育・授業形態に対する示唆を得ることができた。しかし昨年度は小学校教員による保育への参加にとどまっている。したがって、今年度は幼稚園教員による授業参加を通して、幼稚園教育や小学校教育の特徴について協議し、接続期カリキュラムの開発に向けた考察を明らかにすることをめざす。

2. 研究の方法

対象 幼稚園教諭 5名 T2の役割及び観察者
(5歳児担任2名・4歳児担任2名・3歳児担任1名)
小学校教諭 2名：T1の役割
(音楽科専科1名・生活科専科1名)

手続き

- (1)2015年6月・7月 生活科(1年生)の授業に幼稚園教員がT2として参加。他の幼稚園教員は参観。その後幼稚園教員に対して質問紙調査実施。
- (2)2015年7月 音楽科(1年生)の授業に幼稚園教員がT2として参加。他の幼稚園教員は参観。その後幼稚園教員に対して質問紙調査実施。
- (3)2015年7月 幼稚園教員と小学校教員で授業参加に関する研究協議を実施。

3. 結果と考察

- (1)生活科(1年生)の授業後の質問紙調査より授業に参加した幼稚園教員及び参観した幼稚園教員がとらえた幼小の共通点や差異点は表1・表2のとおりである。

<第1回>

日時：2015年6月11日

ねらい：観察やスケッチを通して、朝顔の変化に気づく。

内容：朝顔の観察・スケッチ

Akiko Ikeda, Muthumi Hirokane, Shiho Kake, Humiko Nakayama, Nobutaka Ishii, Shinichi Mathuzaki, Nozomi Nagasawa, Hiroko Ishida, Wataru Inoue, Kazuyo Nakamura, Mayumi Mimura: Development of the Curriculum for the Connection Period of an Elementary School and a Junior High School. -Through Teachers in Kindergarten Joining in Classes at Elementary School-

表1 幼稚園教員による生活科授業（6月）

参加・参観の自由記述

| 共通点 | |
|-----|---|
| 参加者 | <ul style="list-style-type: none"> ・植物の見方に関して、年長児と1年生ではあまりかわりがないように感じた。 ・子どもが記録している内容をよく見ないと、子どもがどんな発見をしているか、どの部分に興味をもつかが分からない。 |
| 参観者 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの思いを認める、子どもの思いが引き出せるように尋ねる。 |
| 差異点 | |
| 参加者 | <ul style="list-style-type: none"> ・年長児のように「見て、見て」の声は少ない。 ・朝顔のつるの長さを比べる時に何かを用いて計るのは、他の教科（算数）で学んだことが活かされている。 ・子どもが他の子どもにないものを見方をしている時に、幼稚園では活動の途中で紹介するが、小学校では活動の最後にすることが多い。 |
| 参観者 | <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園教員は共感的な声かけが多い。子どもは嬉しそうにしているが、小学校教師のかかわりの後に見られた集中や新たな発見などはあまり見られない。 ・小学校教師の声かけは、一人ひとりへ“以前の違いに気づく”というねらいに向かっていくヒントとなっていた。幼稚園教師は“はてな？”を浮かばせる声かけはあったが、ねらいに迫るものがなかった。 ・幼稚園では植物を育てる時はその生長を楽しみにする、対象に心があるかのようにとらえて大事に扱う、小学校ではじっくり違いを見つける。 ・小学校教師はイメージを膨らませながら疑問をもてるような声かけ、疑問をもち調べてみようという意欲をわかせるような声かけ、自分との比較をし、違いに気づけるような声かけもあった。 |

<第2回>

日時：2015年7月8日

ねらい：裏校庭で生き物・花・葉などの前と比べてかわったところを見つける。

内容：裏校庭探検

表2 幼稚園教員による生活科授業（7月）

参加・参観の自由記述

| 共通点 | |
|-----|---|
| 参観者 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの目線に合わせて寄り添っていた。 ・できていることをほめる、笑顔でまずは認める、子どもの発見などに驚くなどのかかわる。 ・子どもの発見に対して、理由を尋ねる。 |
| 差異点 | |
| 参加者 | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもがアメンボを捕まえた時、飼ってみるよう投げかけたが、小学校教員は担任でないと難しい。 ・小学校には自由な時間がない。せっかくの発見を次に活かすことが難しい。 ・生活科という授業を越えて、子どもの文化として飼育・調べるという環境があればよいのではないか。 |
| 参観者 | <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園教員は個にかかわる時間が長く、個どもの満足度は大きい。小学校教員は全体をまんべんなく見る。ねらいに基づいて視点をもってかかわる。 ・小学校教員はねらいに向かって意識づける声かけ。幼稚園教員はねらいにそぐわない子どもの気づきもすべて認め、丁寧に聞く。 ・小学校教員は子どもが見つけたものの状況を子どもが把握しやすいように、また物事を比較して考えることができるような言葉かけが多い。幼稚園教師は共感や情感に訴えるような言葉かけが多い。 ・小学校教師は45分の時間の使い方を非常に意識する。幼稚園教師はあまり時間を気にせず、一人ひとりにゆったりとかかわることが多い。 |

<考察>

幼稚園教員による生活科の授業参加・参観を通して共通点・差異点を明らかにした結果、次のようなことが分かった。

- ・1年生は自分の思いを文字化することができるようになってはきているが、記録の内容をよく見ないと、子どもがどのような発見をしているのかはよく分からない。また幼稚園児は自分の思いをまだ文字化するわけではないので、幼稚園教師は子どもの思いを、子どもの言葉や表情・仕草などから理解しようと

している。そのような意味においては、この時期の子どもたちは、記録だけではなく、実際の子どもの姿をよく見ることが大切であると考えられる。

- ・子どもの発見に対して、教師がまずは認めたり、理由を尋ねたりすることは幼小ともに共通している。一方で、幼稚園教員の方が認めたり共感したりする言葉がけが多いが、小学校教員はねらいに向けて意識づける言葉がけが多いともとらえている。受容・共感的な言葉がけをしてもらった子どもたちはその瞬間は嬉しそうにしているが、小学校教師のねらいに向かった言葉がけの後に、子どもたちが新たな集中や発見を見出している姿から、この時期の子どもたちは、ねらいやその時の状況に応じて、受容・共感的な言葉がけや、ねらいに向かっていく言葉がけを工夫することが大切だと考えられる。

(2) 音楽科（1年生）授業後の質問紙調査より

日 時：2015年7月9日

ねらい：音を耳でじっくり聴いて確かめながら、進んで仲間とかかわり、音を通して仲間づくりをする。

内 容：音探しゲーム

授業に参加した幼稚園教員及び参観した幼稚園教員がとらえた幼小の共通点や差異点は表3のとおりである。

表3 幼稚園教員による音楽科授業（7月）
参加・参観の自由記述

| 共通点 | |
|-----|--|
| 参加者 | ・子どもが楽しみながら保育・授業を展開したり、子どものよさを取り入れたりして教師がかかわる。 |
| 参観者 | ・動作で表現している。 ・音探しの説明の際に、実際に分かりやすいようにやってみる。 ・ルールを守る時に、守れている子どもをほめることは共通している。 ・音の強弱・速さなどをかえながらゲーム感覚で取り組む。 ・聴こえてくる音を擬音で表現する。 |

| 差異点 | |
|-----|---|
| 参加者 | ・幼稚園教員は目線を下げる、いろいろな箇所に動くが、小学校教員は、子どもたちの前に立つ。 |
| 参観者 | ・歌う時に小学校教師は録音の音を使い、子どもに直面しながら表情豊かに歌う。幼稚園教員は子どものテンポに合わせるためにピアノを弾きながら歌うが、子どもと対面することが難しい。 ・マラカスの音が微妙にかえてあり、子どもたちがよく聞き分けていた。 |

<考察>

幼稚園教員による音楽科の授業参加・参観を通して共通点・差異点を明らかにした結果、次のようなことが分かった。

- ・授業を展開する際に、子どものよさを取り入れたり、子どもをほめたりするなどは共通している。この時期の子どもたちは、よさを認めたりほめたりすることが学習の意欲につながるということが考えられる。
- ・子どもが理解しやすいように、教師が動作で表現したり、実際にやってみせながら説明したりすることなどは共通している。生活科の授業では教師の言葉がけに着目する記述が多かったが、音楽科では教師の動作に着目しているという意味においては、教科のねらいによって教師のかかわり方に違いがあることも考えられる。
- ・小学校では歌のスピードが対応できるので録音の音を伴奏にできるが、幼稚園では子どものスピードに合わせるができるように、ピアノで伴奏を演奏することが多い。しかし子どもと対面して歌えないことに幼稚園側の課題があることに気づくことができた。教材や道具を扱う際には、何のために、何をどのように使うかということで環境構成をする際に考えることが必要である。

(3) 研究協議より

幼稚園教員と小学校教員で授業参加に関する研究協議を実施した結果、接続期カリキュラム開発の基礎的情報に関する部分を抜粋したものが、表4から表7である。

表4 子どもの興味・関心に関する協議内容

| | 内容 |
|-----|---|
| 幼 T | 授業の途中で子どもたちがアメンボを捕まえていたが、飼うことはできないので、残念だった。幼稚園では飼おうとしたら飼える環境がある。子どもたちが拾ってきたり見つけてきたりしたものをもっと広げたり変化を比較していけるような授業ができたら楽しいだろうし、授業以外でもできたらいいのかなと思った。 |
| 小 T | 担任であれば教室内で環境をつくっていきやすい。ただ比べるといっても、1年生にとって何かを厳密に比べることは難しい。目の前にあるものに興味・関心をもつから。そこで見つけたことが比べる対象になる。 |
| 幼 T | 授業の時にこそ印象に残るようにしっかり声をかけておけばいいのかもしれない。「この間～見たよね」とか、しっかり自分たちが覚えておけば、次に生かせる。 |
| 小 T | 小学校と幼稚園の違いかなと思うのは、最近では字も習い、書けるようになってきているから、カードに書かせた。体験を表記し、絵などに表現することを通して、彼らなりに再構成していた。 |
| 幼 T | 幼稚園ではそこまで振り返って書くことはしない。 |
| 小 T | ある子は小さなカタツムリを見つけており、過去に季節や場所でどこにカタツムリがいるのかを覚えていたのかもしれない。 |

<考察>

- ・環境の構成の仕方については、幼稚園では空間の使い方の自由度が高いので、子どもの興味を活かしたり、変化に気づけたりできるような環境を活かすことができやすい。小学校では担任であれば教室内の環境をある程度工夫することができることが分かった。
- ・1年生にとっては、事象を比較するといってもまだ厳密にとらえるわけではなく、目の前にあるものに興味・関心をもつという意味では年長児と大きな差がないようにとらえられる。しかし、一方で過去の体験を通してカタツムリがどこにいるのかという季節や場所を覚えていた姿もあり、その場その場の体験を積み重ねていくことが、次の体験に生きていくことが考えられる。

表5 生活科のねらいに関する協議内容

| | 内容 |
|-----|---|
| 幼 T | 生活科の授業でのねらいと言うのは、以前と変わったというところを見つけるというようにとらえたが、これは布石のように感じた。本当はどのようなねらいがあったのか？ |
| 小 T | ねらいはいくつかあって、まずは見つけることが楽しいということ。また、一人では見つけることができなくても、友達と話していたら面白そうだなと思うこと。なにが面白いかというとななのか葉っぱなのか形なのか。そういったほかのことへの構え、観点やこうしたいという意欲的なものを持たせたい。そのきっかけは僕が言ってもいいが子ども同士の交流の中で生まれてくれることが効果的で、その時期の子に合っている。そういうのが好きな子たちは一歩リードしたがるから丁度いい。そこには発見の楽しさがあり、発見するにはどうしたらいいのかという見方や考え方が子どもから出てくる。今度は変化するなかでなにがそうかわっているのか。なんでかわったのか。この前、ある子が「アサガオの色が変わってきているので裏校庭のアサガオの色も変わっているのかもしれない」と言っていた。違った場所でもその子なりに推量していた。そういった観点や考え方を身に付けてほしいと思う。前の授業では前校庭にいったから裏校庭にいった。授業の展開からしたら両方の比較とかしていききたい。 |
| 幼 T | 発見する、見つけるという中にも、それは見つけようとおもって見つけているのか、幼稚園では遊んでいる中で見つけて「ワーすごいね」と見つける。見つけるというのは幅広い意味を持っている。こちらとしてもそこまで高いレベルは求めている訳ではない。そういったところも違うのかもしれない。 |
| 幼 T | 観察の構えという言葉が出たが、今の話から幼稚園では「見つけるぞ」と自覚している訳ではなく、いろいろしている中で「見つける」こともあることは確かだ。 |
| 小 T | 小学校では見たいなと思わせる。何を見たらいいのかというヒントを与える。こうい |

| | |
|-----|---|
| | う風にみていけば見つかるかもとか、触ってもらふことで場所によって違うことも発見できる。 |
| 幼 T | もちろん幼稚園でも見たいなと思える環境構成が大事になってくる。さっきのヒントというのはどういうことか？ |
| 小 T | だいたいは何が変ったのか、一部なのか全部なのか。二年生とかになると葉脈が太くなっているとか、数が増えているとか。大きくなったとかよりも何がどう変ったのかといった具合に狭めていく。言葉には言葉に。一年生とかには「言いたいことはこういうことなんだね」と声をかける。一回よく見ておけば次の日とかにも何が変ったのか分かりやすい。友だちがいつてくれた内容だったり、こっちが整理したりしながら何に着目しているのかを考える。 |

< 考察 >

- ・小学校生活科では、まずは見つける・発見することが楽しいということや、友だちと話していたら面白そうだな、子ども同士の交流の中で発見する意欲をもたせるということをおねらっているが、それは幼稚園にも共通している。しかし、一方幼稚園では、「見つける」と最初から自覚しているわけではなく、遊んでいる中で「見つける」というような子どもの姿にもふれている。この時期の子どもたちは、無自覚に学ぶことから自覚的に学ぶ時期に移行しているのとらえられる。
- ・幼稚園では、「見たいな」と思えるような環境構成を工夫している。一方小学校では、次第に何がどうかわったのかということを実体的に見ていけるようなヒントを与えることを工夫している。また1年生では、言いたいことを言葉できちんと表現できるように、言葉に出すきっかけをつくったり、教師が言い換えて整理したりする工夫を行っている。

表 6 音楽科授業における教師の立ち位置に関する協議内容

| | 内容 |
|-----|---|
| 幼 T | 幼稚園と違うのは先生が前に立つというのが落ち着かなかった。立ち位置とかが小学校と幼稚園では全然違うのだなと思った。 |
| 幼 T | 前に立つことは幼稚園の中でも多いと思う |

| | |
|-----|--|
| | が、なぜ小学校だと違和感を覚えるのか。 |
| 幼 T | T2 としての立場が大きいと思う。小学校の先生は黒板を使ったりするから自分がその立場になると違和感がある。うまく言えないが子どもたち一人一人を見ているから座っていてもいいというか、幼稚園と小学校では立つときの視点が違う。後ろの方で声をかける方が自分的には落ち着きがあった。一回目はほとんど立っていたが、二回目は座っていることが多かった。一回目の時に違和感があった。 |

< 考察 >

幼稚園教師は子どもの前に立つことに対して違和感があると述べている。主には T2 の立場だから、T1 とともに前に立つことに違和感があるととらえられる。しかし一方で、「小学校の先生は黒板を使ったりするから自分がその立場になると違和感がある」と述べていることから、単に T2 の立場だからというだけでなく、幼小教員の立ち位置の違いがあることがうかがえる。幼稚園教師は、クラス全体を見るだけでなく、子どもたち一人ひとりを見るために、前や後ろに立ったり、子どもたちの目線に近づくために座って話したりすることなどを行っていることがうかがえる。

表 7 子どもをとらえる視点に関する協議内容

| | 内容 |
|-----|--|
| 幼 T | 授業に入って楽しかったのは、自分のクラスだった子どもたちの成長が感じられて楽しかったし、嬉しかった。 |
| 小 T | 幼稚園の先生は、子どもの成長を見ていたと感じた。小学校は“こうなってほしい”というところに意識があるのかもしれない。 |
| 幼 T | 子どもたちにとっては、幼稚園から小学校にあがった時に、先生の方に意識の差があるのかもしれない。 |
| 小 T | 小学校は教科の枠で子どもたちをとらえている。もちろん集団づくりも考えており、一番メインは教科内容である。 |
| 幼 T | 幼小の先生で子どもをとらえ方に差があるということは、子どもにとっては幼稚園から小学校にあがった時に、すごくかわった感じがあるのかもしれない。 |

| | |
|-----|--|
| 小 T | 一応、授業の時間が決まっている。算数の時間とか国語の時間とかで子どもは対応していると思う。例えば、生活科の時間に国語の話になると、今は違うと言ってあげる。 |
| 幼 T | 今日参加してくださっている先生方は教科の専科の先生方でいらっしゃる。1年生の担任の先生方であれば、また子どものとらえ方が幼稚園と共通しているところもあるのかもしれない。 |

< 考察 >

- ・幼稚園教員は子どもたちの発達や成長していくプロセスという視点で見ていることに対し、小学校教員は教科の視点で子どもたちを見ていることが分かった。今回は音楽科専科、生活科専科の小学校教員との話し合いだったので、1年生の担任としてのとらえ方はまた別の視点があるのかもしれないが、教育のねらいや内容を構成している幼稚園5領域は、そもそも子どもの発達を見取る視点ということで構成されているということから考えてみても、確かに子どもたちのとらえ方に幼小の違いがあるということが分かった。・小学校は教育内容を教科の枠ごとにとらえている。したがって、例えば生活科の時間に国語の内容が出てきた場合、内容を整理するかかわりを教師は行っている。一方、幼稚園では生活や遊びを通して学んでいるので、教科の区切りのようなものは存在しない。もちろん、教科の内容につながるような基礎的な体験は生活や遊びの中でちりばめられているが、それを総合的な体験の中で学ぶという独自性を改めて再認識することができた。座って話したりするなどを無意識に行っていることがうかがえる。

4. まとめ

幼稚園教員による小学校授業参加を経た後の質問紙調査及び協議を通して、明らかになったことは次の3点である。

1点目は、ねらいに応じた教師のかかわりについてである。幼小接続期における子どもたちへの教師のかかわりは、ねらいによって、受容・共感の言葉がけやねらいに向けて展開していく言葉がけが必要であることが分かった。ただこの時期の子どもたちは、認めてもらったり、ほめてもらったりすることで意欲をもたせるよう

にすることが大切である。また、教科の違いによる教師のかかわりの違いもあることが分かった。例えば生活科のように、思考力を促すことをねらいとする教科は思考を促す教師の言葉がけが工夫されているが、音楽科のように、豊かな感覚を身につけることをねらいとする教科は教師の言葉がけだけではなく、教師の豊かな動作や表情も必要であることが分かった。幼稚園では教科の枠はないが、ねらいによって様々なかかわりを更に工夫することが期待される。

2点目は、教師による子どもの見方・捉え方についてである。1年生になったらある程度は自分の思いを文字で表現できるようにはなるが、幼児期を含めてまだ自分の思いを的確に文字で表現することは難しい。したがって、教師が接続期における子どもを見たり捉えたりする際には、実際の子どもの様子をよく見ることが大切である。また、幼稚園では子どもたちの発達の見方で見ているが、小学校では子どもたちを教科の視点で見ていることが分かった。小学校においては、担任や専科によって子どものとらえ方の違いがあるのかもしれないが、子どもの見方・とらえ方の違いは、子どもたちにも影響すると考えらえるので、接続期における教師の子ども見方・捉え方については、更に協議を深める必要がある。

3点目は、ねらいと、活動の展開や学習スタイルとの関連についてである。幼小接続期では子どもに見てほしい・気づいてほしいというねらいは同じだが、小学校では教師がヒントを与えたり、子どもが言いたいことを言葉で表現できるように支援したりすることが多い。幼稚園でもそのようなかかわり方ももちろんあるが、それだけでなく子ども自身の主体性を活かせるように、子どもが見たいなどと思えるような環境構成を工夫している。また、子どもに見てほしい・気づいてほしいというねらいは同じでも、小学校では自覚的に学べるような活動を展開しているが、幼稚園では無自覚のうちに学んでいるという発達に応じた活動を展開している。更に小学校では教育内容を教科を通して構成しているが、幼稚園では遊びや生活を通して構成しているということが分かった。

以上のような幼稚園・小学校の共通点・差異点が明らかになったが、幼小接続期にはこのような共通点・差異点をどのようにつないでいけばよいかということの検討を更に深めることで、

幼小接続期における適切なカリキュラム開発に資することができるにとらえられる。

引用（参考）文献

- 1) 文部科学省(2010)幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方
- 2) 亀山秀郎(2011)生活科に繋がる自然との関わりにおける気付きの検討—KJ法を用いた年長組保育者の記録から
- 3) 善野八千子・前田洋一(2012)幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅱ
- 4) 大分県・大分県教育委員会(2010)小1プログラム対策推進事業 幼児教育と小学校教育の連携ガイドブック
- 5) 高知市教育委員会(2014)アプローチカリキュラムスタートカリキュラム事例集
- 6) 福井県幼児教育支援センター(2015)福井県幼保小接続プロジェクト 学びをつなぐ希望のバトンカリキュラム
- 7) 池田明子・井上弥他 10名(2015)幼小接続期における感じる・考える・表す活動の開発—かかわりを誘発する環境構成を通して—